実践報告

地域志向学習における「ふくし・マイスター」養成の実践
── ふくしコミュニティプログラムの取り組みから ──

佐　藤　大　介
日本福祉大学　全学教育センター
中　野　正　隆
日本福祉大学　全学教育センター

Practice of "FUKUSHI MEISTER" Training in the Community Oriented Learning
－From FUKUSHI Community Program Initiatives－

Daisuke SATO
Inter-departmental Education Center,Nihon Fukushi University
Masataka NAKANO
Inter-departmental Education Center,Nihon Fukushi University

Keywords：ふくし・マイスター，地域志向学習，フィールドワーク，フィールドワークノート

1．はじめに

日本福祉大学（以下，本学）は文部科学省の 2014 年度「地（知）の拠点整備事業 -Center for Community-」(以下，COC 事業[1])）に申請し，「持続可能な『ふくし社会』を担う『ふくし・マイスター』の養成」の採択を受けた．COC 事業では，「地域のための大学」として，全学的に地域を志向した教育・研究・社会貢献の取り組みを地域社会と連携して展開することが求められている．これは，地域のニーズと大学のシーズ・資源のマッチングを図り，地域課題の解決，地域の活性化に寄与することを目指しており，地域課題の解決に主体的に行動できる学生を育成することが期待されている．また，本学においても COC 事業は，本学学則（第 1 章第 1 節第 2 条）の教育目標にある「真理の探究と人間の尊厳を基に，21 世紀の新しい福祉社会と持続可能な地域社会の構築に貢献する指導的人材を育成すること」を達成するための礎ともなる取り組みである．

本学の COC 事業の目的のひとつは「ふくし[2]」の視点を持って地域課題の解決に取り組むことができる人材「ふくし・マイスター[3]」を養成することである．ふくし・マイスターは，「地域志向科目」に指定された学部科目と全学共通科目による体系的な地域連携教育で養成される．また，2015 年度入学生から全学部の 1 年次ゼミ科目において「ふくしコミュニティプログラム」を実施し，これにより，地域への関心を高め，その後，学部と全学教育センターの地域志向科目を受講し，さらに実践的に，地域の理解，地域への働きかけ，多職種・多分野連携の学びを深めることができる仕組みである．

これら COC 事業のスタートに合わせ，全学教育センターでは地域連携教育部門において，ふくし・マイスター養成に係る教育支援を行っている．例えば地域志向教育に係る活動先や地域から招くゲスト講師の人選など，担当教員の求めに応じてコーディネート業務を担う．特に 1 年次の「ふくしコミュニティプログラム」については，演習科目における地域志向教育の進め方や，活動補助申請など各学部の求めに応じて対応している．さらに，各学部においての開講計画の策定にあたっては，「学習目標の設定」，「授業に盛り込んでほしい教育内容」，「成績評価の方法」の項目に，「ふくしコミュニティプログラム」の内容を組み込むこととしている．

そこで，本稿では，ふくし・マイスターの養成並びに地域志向学習における，本学の主要な取り組みの一つである「ふくしコミュニティプログラム」の実践事例を報告する．なお，ふくしコミュニティプログラムは 2015 年度入学生から全学部の 1 年次ゼミ科目等に配置されているため，今回は，社会福祉学部の総合演習科目（ゼミ科目）内で取り組まれたフィールドワーク事例を取り上げる．

2．ふくし・マイスター養成の枠組み

ふくし・マイスターは地域志向科目に指定された学部科目と全学共通科目による体系的な地域連携教育で養成されている．ふくしコミュニティプログラムは，本学全 6 学部の基礎ゼミなど 1 年次全員履修科目または必修科目の中の，地域志向学習として取り組まれる．この，ふくしコミュニティプログラムは，科目の一環として行われる 5 つのステップ「①地域を知る，②調べる，③地域と係わる，④学習を深める，⑤成果をまとめる」を組み合わせた学習プログラムで構成される（表 1）．この 5 つの学習ステップは，学内や学外で地域の方の話を聞いたり地域について調べたり，行事やボランティア活動の体験学習をするなど，様々な方法で行われる．本学の地域志向学習では，ふくしコミュニティプログラムを実践するこれらの様々な方法を，通常の教科の学習と区別する意味で「フィールドワーク」と位置づけている．

さらに，地域志向学習では，ふくしコミュニティプログラムとして行われる学生たちのフィールドワークを支援するために，本学の全学教育センターによる全学部共通の地域志向科目として，オンデマンド科目が設定されている．その後は 1，2 年次に地域に係る基礎的知識，3 年次に多職種・多領域連携に係る実践的な地域志向科目を全学教育センターが提供するとともに，各学部でも地域志向科目を指定して，それぞれの専門性に対応した地域連携教育を進めている．

こうした地域志向科目群の履修を積み上げ，10 科目 20 単位以上を取得するとともに，リフレクション（学びの振り返り）ができた学生を「ふくし・マイスター」としての修了証を授与することとしている．(図 1)

3．ふくしコミュニティプログラムの取り組み

(1) フィールドワークの位置づけ

前述の通り，本学では，ふくしコミュニティプログラムを実践する様々な方法を，通常の教科の学習と区別する意味で「フィールドワーク」と位置づけている．本来，フィールドワークと一口に言っても，高度な研究の一環として行われるものもあれば，大学教員以外に話を聞いて学ぶというような，もっと簡単にできるものもあり様々である．そもそも，フィールドワークの始まりは，人類学者が民族史を書くにために開発した手法であると言われているが，現在は，心理学・社会学・教育学・認知科学・看護学・経営学などの分野でも重要な研究方法とされている（箕浦 2003）．

これら，本来あるべきフィールドワークのエッセンスを大切にしながらも，本学の地域志向学習では，学生たちが学習の効果を高める方法の基礎を学ぶことを主眼としている．いきなり高度なものに無理してチャレンジす

表 1．ふくしコミュニティプログラムにおける 5 つの学習ステップ

5 つのステップ	内　　容
①地域を知る	地域をアセスメントする．○○になって町や場所を感じる．子どもになって・・・等
②地域を調べる	フィールドワークへの意識を「動因」から「誘因」へ結びつける．
③地域と関わる	地域・現場・実際を捉える．「みる・きく・知る」．
④学習を深める	他者の意見を聞きながら，自分の変容，深まりを持たせる．さらに地域を考える．
⑤成果をまとめる	5 つのステップで学んだことのリフレクション（振り返り，反省，熟考）を行う．

注）5 つの学習のステップに著者が内容を解説

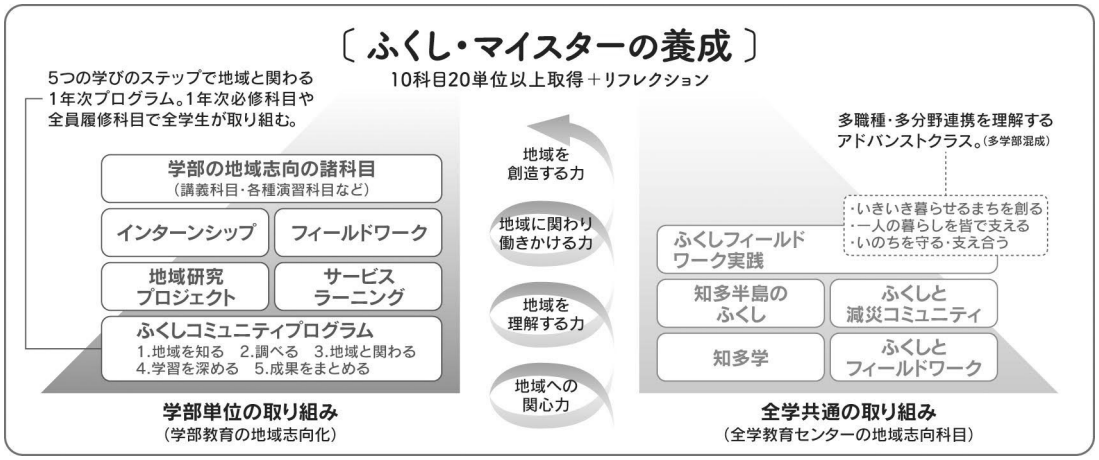


図 1．ふくし・マイスター養成の枠組み

るのではなく，まずは取り組みやすい，本学が示した「地域志向学習フィールドワーク（表 2)」の方法から地域学習を始めることを推奨している．本学の地域志向学習方法では，フィールドワークこそ，学びの効果を高める方法として重要視している．

(2) フィールドワークの実践事例

本学は，全学部の 1 年次ゼミ科目等において「ふくしコミュニティプログラム（表 3)」を実施している．本節では，社会福祉学部の総合演習科目（ゼミ科目）内で取り組まれた，ふくしコミュニティプログラムにおけるフィールドワーク実践事例を取り上げる．

表 2．本学における地域志向学習フィールドワークの種類

種類	内　容
①調査研究型 フィールドワーク	ゼミなどで取り上げた何らかのテーマについて，実際の状況や課題が生じている原因を確認するために行うフィールドワークである．調査研究型として最も取り組みやすいのは，調査研究したいテーマについて詳しい人物を探して，大学に来てもらう，またはその人を訪ねて話を聞くフィールドワークである．広い意味の「ふくし」の視点で，学内や地域を見て回り課題を見つけたり，出会う学生や地域の方々に意識を聞いたりする調査も，比較的取り組みやすいフィールドワークである．学内の教職員に，自分たちがテーマとして取り上げた社会課題などについての関わりや意識を聞くという調査も，学びを深めるためによいフィールドワークである．
②体験学習型 フィールドワーク	体験を通して知識や技能を身につけるフィールドワークである．たとえば，毎年秋に本学キャンパスで行われる「安全の日」では地域の方々にも参加していただく防災訓練が行われるが，防災，救護，地域自治，まちづくりなど，様々なテーマの体験学習型フィールドワークができる．また，地域に目を向ければ，職場体験（インターンシップ）プログラムなど，様々な体験学習型フィールドワークができる行事や研修もある．
③ボランティア活動型 フィールドワーク	地域で行うボランティア活動は，学生が社会の多様な側面を学んだり，コミュニケーション力など社会性を高めたりする良いフィールドワークの機会になる．本学には，地域と関わりが深い多様なボランティア系の学生サークルがあるから，サークルに入って行う活動やサークルが催す行事などを利用した体験学習型フィールドワークもできるはずである．他者や社会に役立とうという意欲を強く持つことが前提であるが，地域のボランティアセンターを通してボランティア活動に参加し，活動を通した学びを大学で振り返りまとめて報告することで，活動をフィールドワークとして位置づけることも可能である．

注）ふくし・マイスター HANDBOOK　2016より

表 3．各学部におけるふくしコミュニティプログラムの実施状況：2015 年度

学部	主な科目	内　　容
社会福祉学部	総合演習	春季セミナーにおいて知多地域市町をフィールドワーク 等
子ども発達学部	総合演習Ⅱ	地域の福祉・教育・保育等の実践者によりレクチャー 等
健康科学部	環境共生入門	伝統的な建築に触れる，地域をフィールドワーク 等
経済学部	地域社会と共生	東海市・太田川駅周辺のフィールドワーク 等
国際福祉開発学部	基礎演習 Ⅱ	知多半島を中心にフィールドワーク 等
看護学部	基礎ゼミナールⅡ	健康をテーマに東海市内の施設をフィールドワーク 等

1）社会福祉学部における地域志向学習を取り入れた教育計画

日本学術会議では文部科学省からの依頼のもとに，大学教育の分野別質保障のあり方について課題別委員会を設置して検討を進めている．社会福祉分野については，社会学委員会社会福祉学分科会で検討され，2014 年 9 月には「大学教育の分野別質保障のための教育課程編成上の参照基準 社会福祉分野（第 2 案)」を公表している．その中で，ソーシャルワーカーなど福祉の専門職として就職している学生と合わせて，一般企業等に就職していく学生も含めて，学生が習得すべき能力やスキルを明確にすることを強調している．

具体的には社会福祉分野の大学教育を通じて，①社会福祉学に固有の能力としての「尊厳を重視し支援する力」「生活問題を発見し社会化・普遍化する力」「社会資源を調整・開発する力」「社会福祉の運営に貢献する力」「権利を擁護する力」「社会を開発する力」を身につけることを目指すとともに，②ジェネリックスキルとして，個人と社会の幸福を追求する上で，市民として問題に気づき行動することができる，福祉マインドを身につけることを目指すとしている．

本学においては，COC 事業の採択を受けて，「持続可能な『ふくし社会』を担う『ふくし・マイスター』の養成」をテーマに取り組み，社会福祉学部はその基幹を担う学部として，地域に関わる講義や演習をこれまで以上に充実していくことを目指しており，参照基準が示すジェネリックスキルを身につけることとリンクした内容として教育計画内に盛り込んでいくこととしている．

2）社会福祉学部における「ふくしコミュニティプログラム」の位置づけ

COC 事業によって新設された「ふくしとフィールドワーク」（オンデマンド科目）は，地域に関わるフィールドワークの意義を理解することを目指すものである．同科目を卒業必修とすることで，フィールドワークに必要な基礎知識を全ての学生が身につけることとなる．さらに，「総合演習」科目内で実施される「ふくしコミュニティプログラム」は「ふくしとフィールドワーク」での学びを踏まえて，地域に関わる体験を全ての学生が積む．なお，「総合演習」では，ふくしコミュニティプログラムの実施だけでなく，地域が抱える課題を幅広い視野で発見できるための教養教育や，学習成果を他者に伝えることができるようにするためのリテラシー教育も行うとしている．

3）社会福祉学部におけるフィールドワークの実践事例

社会福祉学部の総合演習科目内で実施されているふくしコミュニティプログラムは，社会福祉学部の新入生が大学生活に早く馴染み，これから 4 年間大学で学ぶことの意味や目標を考えられるよう，学部が 5 月に主催する 1 泊 2 日の宿泊型「春季セミナー」に組み込まれている．春季セミナーは社会福祉学部の伝統的な学習の場であり，春季セミナーにおける，フィールドワーク（ふくしコミュニティプログラム）の事前学習，事後学習等は総合演習内の各ゼミで学習が進められる．なお，春季セミナーの実施にあたり，フィールドワークの基本的な観察視点を，社会福祉学部全学生を対象に講義を行い，さらに全学生が学びを共有しあう，フィールドワーク報告会も実施される．

春季セミナーのねらいは，①社会福祉学部が導入教育として，「読む」，「書く」，「話す」という基本的な学ぶ力の養成を重視していることを，「宿泊セミナー」のプログラムを通して学生が実感し，今後の学びの発展につなげる．②社会福祉学部として，地域における取り組みや実践を通じた学びを重視していることから，その導入として「宿泊セミナー」においてフィールドワークに取り組む．③プログラムを通じて，人とのコミュニケーションの重要性や方法を体験的に学ぶ．④宿泊という共有体験とプログラムを通じて，クラス内外の仲間作りを進める．の 4 点であり，フィールドワークの実施を春季セミナーにおける「ねらい」に含めていることがわかる．

また，表 4 のように 2016 年度の本学の社会福祉学部のフィールドワーク先は全 10 コースを設定しており，それぞれのコースには 1〜2 ゼミ（1 ゼミあたり 20 名程度）が割り当てられる．これは，コースごとに「エリア」と「テーマ」が設定されており，ふくしコミュニティプログラムの 5 つの学びのステップ（表 1）である「③地域と関わる」がプログラムとして設定されている．

では，表 4 にある 10 コースから，⑩知多市（知多半島の NPO によるまちづくりと周辺地域のフィールドワーク）を取り上げフィールドワークのプログラム内容を紹介する．このコースでは，テーマの通り愛知県知多半島に属する NPO の概要を学び，実際に NPO の実践やそのまちづくりと関わるプログラム内容となっている．詳

表 4．社会福祉学部におけるフィールドワーク先一覧：2016 年度

エリア	内　容
①半田市	はんだまちづくりひろばと知多半田駅前周辺地域のフィールドワーク
②半田市	半田市観光協会と蔵まち周辺地域のフィールドワーク
③半田市	半田市岩滑地区の「ごんぎつねの里」周辺のフィールドワーク
④半田市	半田市岩滑地区の NPO・地区コミュニティ訪問と周辺地域のフィールドワーク
⑤半田市	半田市亀崎地区の古民家コミュニティスペースと周辺地域のフィールドワーク
⑥高浜市	住民主体で推進されている「高浜市のまちづくり」を学ぶフィールドワーク
⑦武豊町	武豊町の地域防災ボランティアの会と周辺地域のフィールドワーク
⑧武豊町	武豊町の観光施設と醸造のまちのフィールドワーク
⑨知多市	知多市住民による常設型サロンと周辺地域のフィールドワーク
⑩知多市	知多半島の NPO によるまちづくりと周辺地域のフィールドワーク

注）いずれのエリアも愛知県内の市町である．

表 5．春季セミナーフィールドワークプログラムの一例：2016 年度

<table>
<tr><td>エリア</td><td colspan="3">テーマ</td></tr>
<tr><td>知多市</td><td colspan="3">⑩知多半島のＮＰＯによるまちづくりと周辺地域のフィールドワーク</td></tr>
<tr><td colspan="4">コース概要</td></tr>
<tr><td colspan="4">知多半島は，1990 年代から，生活に困りごとを抱えた住民たちが住民たち同士でささえあう仕組みを作ってきた地域です．こうした住民の活動を支えてきたＮＰＯ法人地域福祉サポートちたの方から，知多市市民活動センターで知多地域のＮＰＯについてお話を聞いた後，知多市内で活動している NPO の現場を見学します．その後，再度知多市市民活動センターへ戻り，振り返りを行います．</td></tr>
<tr><td colspan="4">ルート</td></tr>
<tr><td colspan="4">１．協力依頼先
・NPO 法人地域福祉サポートちた
・NPO 法人びすた～り
２．スケジュール</td></tr>
<tr><td></td><td>12:20</td><td colspan="2">大学出発</td></tr>
<tr><td></td><td>12:50</td><td colspan="2">知多市市民活動センター到着</td></tr>
<tr><td></td><td>13:00</td><td colspan="2">「地域福祉サポートちた」よりレクチャー＆質疑（30 分）
主な内容　・知多半島の NPO について
・障害者の地域活動について</td></tr>
<tr><td></td><td>13:40</td><td colspan="2">バス移動　---＞　NPO 法人びすた～り へ</td></tr>
<tr><td></td><td>14:00</td><td colspan="2">NPO 法人びすた～り畑到着　※山道を 100m ほど歩くので多少汚れても良い靴で 10 数名で 2 グループに分かれる</td></tr>
<tr><td></td><td></td><td>畑コース
14:00　畑で下車
14:10　お話＆質疑
・法人の活動概要
・畑で取り組んでいること
＜学びのポイント＞
・精神障がい者が地域で活動できる場所になっている
・ヤギ飼育，自然栽培
14:30　出発（田んぼへ向かう）</td><td>田んぼコース
14:10　田んぼで下車
14:20　お話＆質疑
・法人の活動概要
・田んぼでの取り組みなど
＜学びのポイント＞＞
・精神障がい者が地域で活動できる場所になっている

・14:50　出発（両コース乗車）</td></tr>
<tr><td></td><td></td><td colspan="2">15:10　NPO 法人びすた～り　ふるぼにて振り返り（30 分）</td></tr>
<tr><td></td><td>16:10</td><td colspan="2">NPO 法人びすた～り　ふるぼ出発</td></tr>
<tr><td colspan="4">３．事前学習のポイント
・知多市の概要を調べる（人口，地域資源，福祉施策，市民活動等）
・NPO 法人とは何か，どのような課題があるのかを調べておく．
・住民主体のまちづくりにはどういうものがあるのかを調べておく．
・住民活動（市民活動）に関してヒアリングしたい事柄（インタビュー・ガイド）を整理する．
４．訪問先について
・NPO 法人びすた～り　→　農業を通して精神に障害のある方への支援を行っています．</td></tr>
</table>

細については表 5 を参照いただきたい．これら，実際のフィールドワーク前には学習ポイントを訪問先と確認をし，ゼミごとに事前学習を重ねることになる．なお，全てのコースにおいて，フィールドワーク先との調整等は全学教育センター所属の地域連携コーディネータが中心となり，担当教員とフィールドワークのプログラム設計

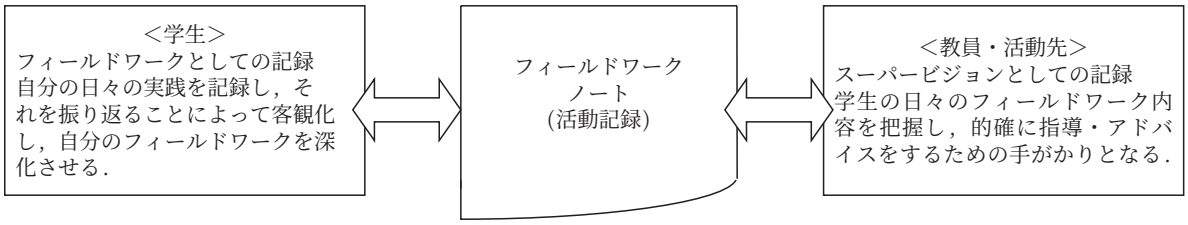


図 2．学習ツールとしてのフィールドワークノート

を行うこととなる．

(3) フィールドワークのリフレクション

フィールドワークは，地域に赴き，何かしらの学びや活動を実施するだけではない．本学では学びや活動を通してリフレクション（学びの振り返り）を行うことを重視しており，リフレクションを積み重ねることで自己形成力を高めていくことができると考えている．

リフレクションは本来，「内省や熟考」という意味があるが，ふくしコミュニティプログラムにおけるリフレクションでは，自分が実施したフィールドワーク等を通して，自分自身のこと，地域のことに関心を寄せ，さらには社会への問題意識などを育むために実施する意味がある．これら，「フィールドワークでの学び」と，その学びをしっかりと記憶に留め，身体に定着させる「リフレクション」を積み重ねることで，地域志向学習における「ふくし・マイスター」養成が行われることになる．

(4) フィールドワークの活動記録

フィールドワークに限らず，自らの体験や経験を「記録に残すこと」は大切なことである．佐藤（2008）によればフィールドワークとは，「体験すること」「見ること」「書くこと」という三つの作業は，切っても切り離せない密接な関係があるとしている．つまり「記録」として「書く（文章化)」ことで自分の考えを整理でき，さらには日々のフィールドワーク等について教員や活動先から何かしらのアドバイスを受ける手がかりとなる．

ふくしコミュニティプログラムにおいては，記録を残す目的として，①実践を記録し自分のフィールドワーク体験を振り返ることができること，②活動先の担当者・ゼミ担当教員に自分のフィールドワーク体験を伝えることができること，を目的に「フィールドワークノート」を学習ツールとして準備している．

これらは，学生自身の日々の実践を記録し，それを振り返ることによって客観化し，自分のフィールドワークを深化させるためのものである．教員や活動先にとっては，学生の日々のフィールドワーク内容を把握し，的確に指導・アドバイスをするための手がかりともなる（図 2)．

また，一般的なフィールドワークで使われる記録ノートは，白紙か罫線だけのノートが多いが，ふくしコミュニティプログラムにおけるフィールドワークノートは「ふくしコミュニティプログラム」の 5 つの学びのステップである「①地域を知る，②地域を調べる，③地域と関わる，④学習を深める，⑤成果をまとめる」の学習プログラムに沿って使用できるよう，改良を重ねたものである．図 3 のフィールドワークノート（筆者が作成し全学生に配布）は，春季セミナーフィールドワーク（表 5 の活動先）において，実際に学生が使用したものである．

(5) フィールドワークを支援する学内の仕組み

本学では，全学教育センターに学生のフィールドワーク支援をはじめとして，地域志向学習や地域連携教育を全般的に推進する「サービスラーニングセンター（全学教育センター地域連携教育部門)」と「Ｃラボ（Community Laboratory の略，地域連携推進拠点)」を設置している．

サービスラーニングセンターは学生のフィールドワークなどの地域連携教育全般の推進のために，情報提供，相談助言，学生と地域の方たちの学び合いのフィールドの開拓，フィールドワークのための地域資源バンクの管理運営など，専任教員と地域連携コーディネータが常駐して支援を行っている．

Ｃラボは本学キャンパスのある愛知県美浜町，半田市，東海市それぞれに設置されている．さらに地域連携コーディネータを配置し，地域との交流・連携の拠点として，地域団体やそれらの取り組みに関する情報収集・発信，地域での活動や，学生との協働による取り組み提案など

図３．ふくしコミュニティプログラムにおけるフィールドワークノート使用例

【A】フィールドワーク・ノート（①地域を知る）

地域名	知多市	ゼミ名	
氏　名		学籍番号	

1．最初の印象（見て、聞いて、嗅いで…といった五感でとらえたことや、自分の心情によるもの）
例）静かな町だ、人が多くて落ち着かない。空気がきれい。等
曇り空だったせいか、全体的に暗く見えた。静かだが街の方では様々な者が混ざりつつも車の音が響く。田舎の方では肥料の臭いがした。

2．歩いてみて感じること（自分が行動する時の地域の側面について）
例）坂が多くて疲れる。風景に変化がない。住宅が多い。等
街の方は団地が沢山あり、田舎の方は一戸建ての家が集団で連なっていた。産業道路等の道添いに木や竹が沢山あった。

3．立ち止まって（または座って）みて感じること（自分が静止して観てみえる地域の動きについて）
例）自転車に乗っている人が多い。車の量が少ない。足早に通り過ぎる人が多い。等
街の方は車が多い。広めの遊歩道があり、ベンチがある等休憩出来る所がある。

4．地域にいる人々について（地域住民もしくはそこで活動している人たちの印象、話しかけたりする必要はない）
例）若者が少ない。立ち話をしている人が多い。サラリーマンが多い。野良猫が多い。等
思っていたより人を見かけなかったが車の数は多かった。
散歩している人。

5．地域が持つ利便性について（地域機能の評価）
例）交通手段が多い。深夜営業の店が少ない。娯楽機能が低い。等
街の団地の下に郵便局の入った商店街がある。交通手段は主に車だと思う。広い公園がある。

6．自分が移り住むとしたら、どうか（生活の視点による統合評価）
例）最寄の鉄道駅までは遠いため、移動には不便だが、静かな環境なので勉強をするには良い。等
介護施設やNPOをまとめるサポートちたがあるので、充実した生活が送れると思う。

7．その他・気づいたこと
団地の中につつじが丘コミュニティセンターがあった、中電があった。

Point: ふくしコミュニティプログラム５つの学びのステップ ①地域を知る ②地域を調べる ③地域と関わる ④学習を深める ⑤成果をまとめる
地域をアセスメントする。参考：○○になって、町や場所を感じてみる（例 小学生になって、高齢者になって。等）

【B】フィールドワーク・ノート（②地域を調べる）

地域名	知多市	ゼミ名	
氏　名		学籍番号	

事前学習ポイント
1）知多市の「地域情報」を調べる
2）NPOとは何かを調べてみる。時に訪問先のNPO情報は必ず調べる。
3）訪問先の活動内容（仕事）を調べてみる。さらに疑問点を整理する。
4）事前学習から出てきた私の「興味・関心」を整理する。

地域の情報
1）人口・人物：総人口：86,025人（男：43,591人／女：42,494人）
世帯数：34,934世
〇山崎武司選手、小沢一敬さん、木下あゆ美さん、浅尾拓也選手
2）歴史・産業：昭和45年に誕生した。
沿岸には、発電所や製油所などの臨海工業地帯があり、農業も盛んな都市として発展してきた。
3）福祉・医療：未熟児養育医療、難病の新たな医療費助成制度、こども医療、母子家庭等医療、障害者医療、精神障害者医療、後期高齢者福祉医療（健康推進課・保険医療課）
4）その他：【祭り】関連施設名（文化・風土・食習慣・歴史）大祭、節分豆まき式、佐布里池梅まつり、岡田春まつり、日長の獅子舞まつり、南粟の神子舞子、【国指定重要無形民俗文化財】尾張万歳

私の興味・関心
地域への興味・関心を整理しましょう
・知多市のNPO法人の始まりや、他にどんなNPO法人があるか。
・精神障がいの方の自然栽培農業の効果　・ヤギの効果
・今後の課題

地域イメージ
地域のイメージを整理しましょう
ホームページを見て、公式のYou TubeやFace bookを運営している分、若い人にも目に留まるようにしている（若い人が多い）イベントもあり、観光産業にカを入れている。工業地帯で経済力がある。

活動の目標
フィールドワークでの活動目標を整理しましょう（こんな活動したい、こんな事を調べたい等）
・地域との繋がりを知りたいので、何故所在地を知多市にしたのか
・障がい者の方への対応やどんな活動をしているか　を聞く。

Point: ふくしコミュニティプログラム５つの学びのステップ ①地域を知る ②地域を調べる ③地域と関わる ④学習を深める ⑤成果をまとめる
このシートを用いてフィールドワークへの意識を「動因」から「誘因」に結び付ける。

【C】フィールドワーク・ノート（③地域と関わる）

地域名	知多市	ゼミ名	
氏　名		学籍番号	
活動目標	NPO法人から知多市を知る		

活動内容

活動プログラム	自分が実際に取り組んだ事
12:00 大学 出発	
13:10 知多市市民活動センター到着	さんからお話を聞く
バス移動	
NPO法人びすたーり 到着	さんから説明を聞く
NPO法人びすたーり 出発	ヤギの散歩
NPO法人びすたーりふるほ 到着	スタッフさんからお話を聞く
16:00 NPO法人びすたーりふるほ 出発	
18:00 ホテルたつき 到着	

活動メモ
地域の様子、魅力的に感じたこと、疑問に思ったこと、などをメモしておきましょう
様子：NPO法人の様な施設を見かける、団地があり、町は人気があるが、少し離れると森林や竹林、田畑がある。
魅力：市民活動が活発であり、様々な方を対象としたNPO法人があり、将来の問題を市民全体で考えていること。
メモ：地域ビジョン　0～100歳の地域包括ケア

活動のふりかえり
活動目標が達成されたか、ふりかえってみましょう
地域とNPOの関わりを知りたかったのだが、目標を大きくしてしまったので難しくなってしまった。サポートちたの方に所在地を知多市にした理由を聞ければよかった。　2002年3月に知多市委託事業が行われる等、市としても福祉にカを入れていると思う。　また、愛知県、豊田市、一宮市民活動支援センターからにも委託されていた。

Point: ふくしコミュニティプログラム５つの学びのステップ ①地域を知る ②地域を調べる ③地域と関わる ④学習を深める ⑤成果をまとめる
このシートを用いてフィールドワークを実施し、地域・現場・実際を捉える。「みる・きく・知る」

【D】フィールドワーク・ノート（④学習を深める）

地域名	知多市	ゼミ名	
氏　名		学籍番号	

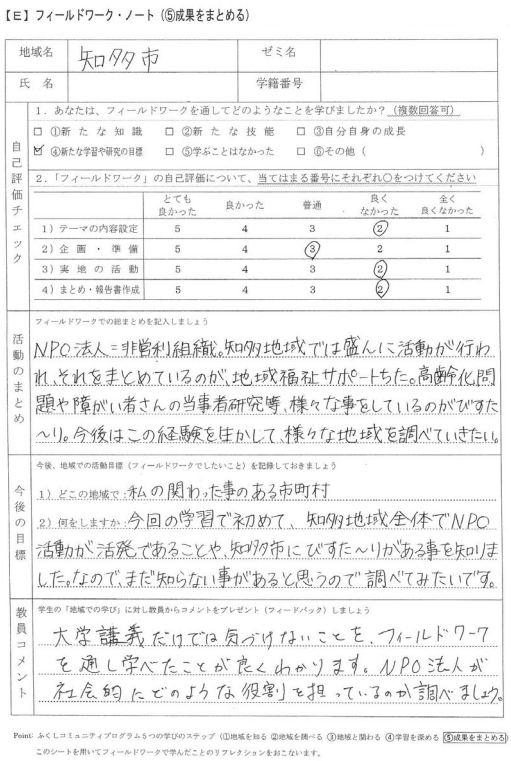
興味・関心の深まり
フィールドワークを通し、事前学習時から更に深まった興味・関心は何ですか？具体的に記入しましょう
・他の施設での活動方法　・アニマルセラピーの効果（ヤギ等）
・2025年問題への対応（自分が出来ること）・浦河「べてるの家」
・精神障がいの種類や症状　・当事者研究の効果
・幻覚、妄想大会　・他の地域の福祉の対応

地域イメージ変容
事前学習時から変わった今の「地域のイメージ」を整理しましょう
若い人というイメージやあまり知多地域で印象が無いイメージだったが、福祉については海外から視察がくるぐらいに市民の全年齢の方がNPO法人等を利用し、自らがよりよい暮らしが出来る様に行動をする活発なイメージ。

グループ討議
今回のフィールドワークについてグループディスカッションをしてみましょう
・知多市というのは範囲が大きすぎて難しい。
・自然栽培というのは自立訓練（生活訓練）の一部である。
・北海道の浦河にある「べてるの家」を参考に当事者研究
・刈谷で活動していた高山さんが知多の土地を借りて行っている。

地域を考える
どうすれば「地域（まち）が、（もっと）幸せになる」のか考えてみましょう
知多地域の様に、全年齢の市民が生活改善の為に行動する事が「地域が幸せになる」元であると思う。なのでまずはNPO法人の存在を地域の方に知ってもらい、参加することも一つの方法だと思う。そして、積極的に活動をすることによって多岐に渡って効果が出て幸せになると考えた。

Point: ふくしコミュニティプログラム５つの学びのステップ ①地域を知る ②地域を調べる ③地域と関わる ④学習を深める ⑤成果をまとめる
このシートを用いて他者からの意見も聞きながら、自分の変容、深まりをもたせる。さらに地域を考えるきっかけとする。



【E】フィールドワーク・ノート（⑤成果をまとめる）

地域名	知多市	ゼミ名	
氏　名		学籍番号	

自己評価チェック

1．あなたは、フィールドワークを通してどのようなことを学びましたか？（複数回答可）

□ ①新たな知識　□ ②新たな技能　□ ③自分自身の成長
☑ ④新たな学習や研究の目標　□ ⑤学ぶことはなかった　□ ⑥その他（　　）

2．「フィールドワーク」の自己評価について、当てはまる番号にそれぞれ○をつけてください

	とても良かった	良かった	普通	良くなかった	全く良くなかった
1）テーマの内容設定	5	4	3	②	1
2）企画・準備	5	4	③	2	1
3）実地の活動	5	4	3	②	1
4）まとめ・報告書作成	5	4	3	②	1

活動のまとめ

フィールドワークでの総まとめを記入しましょう

NPO法人＝非営利組織。知多地域では盛んに活動が行われ、それをまとめているのが地域福祉サポートちた。高齢化問題や障がい者さんの当事者研究等、様々な事をしているのがわかりました。今後はこの経験をいかして、様々な地域を調べていきたい。

今後の目標

今後、地域での活動目標（フィールドワークでしたいこと）を記録しておきましょう

1）どこの地域で：私の関わった事のある市町村
2）何をしますか：今回の学習で初めて、知多地域全体でNPO活動が活発であることや知多市にびすた～りがある事を知りました。なので、まだ知らない事があると思うので調べてみたいです。

教員コメント

学生の「地域での学び」に対し教員からコメントをプレゼント（フィードバック）しましょう

大学講義だけでは見つけないことを、フィールドワークを通し学べたことが良くわかります。NPO法人が社会的にどのような役割を担っているのか調べましょう。

Point: ふくしコミュニティプログラム5つの学びのステップ（①地域を知る ②地域を調べる ③地域と関わる ④学習を深める ⑤成果をまとめる）このシートを用いてフィールドワークで学んだことのリフレクションをおこないます。

を受け付けている．

また，これらのふくしコミュニティプログラムやフィールドワークの活動成果の発表の場として，「ふくしAward」を開催し，表彰を行っている．2015年度は全学部・学年から合計79件のエントリー（日本語部門56件，英語部門23件）があり，内，ふくしコミュニティプログラム実施対象の1年生からは52件と約6割が1年生からの応募であった．さらに，事前審査とふくしAward当日のプレゼンの結果，最終的に日本語部門9件，英語部門8件が入賞．当日の参加者は約100名程度であり盛況に実施された．

このように，フィールドワークを支援する学内の仕組みは，準備から実施，さらには報告まで，学内の様々な組織体制や学習システム内に組み込まれている．

5．おわりに

本稿では，ふくし・マイスターの養成並びに地域志向学習における本学の主要な取り組みの一つである，ふくしコミュニティプログラム（フィールドワーク）の実践事例を報告してきた．筆者自身，社会福祉学部総合演習の担当教員も担っているが，「フィールドワークを実施する」のと「フィールドワークの手法を教えること」に大きなギャップを感じている．「フィールドワーク」という手法により，地域志向学習で実践する為には，学生に「フィールドワーク」を，わかりやすく伝える必要がある．たとえば，学生に「さあ，地域に出てフィールドワークをしてきなさい」と何の準備もなく，フィールドワーク先に送り出したとしても，学生は，単にぶらぶらと外を歩くだけとなる．

そこで，筆者はフィールドワークの最も大切なポイントを「意識をして観る（観察）ことである」と学生に伝えている．何気ない風景や，人々，街並み，さらには地域の課題も，学生が意識化された環境下で，観る（観察）ことができれば，それは本来のフィールドワークの意味を成すものになるであろう．これには，本来フィールドワークという研究方法が備えている「魅力」と，地域志向学習には欠かせない「地域に踏み出し，自らが知ることの喜び」を学生にも実感してもらう意図も含まれている．

また，社会福祉学部総合演習担当の他教員からは，ふくしコミュニティプログラムにおけるフィールドワークへの評価として，「学生が地域のことを知る上でとても効果的であった」などの高評価がある一方，「人々の暮らしや人々の想いなど，人間の生活に視点を当てられるとより良い」，「フィールドワーク先で話を聴くだけよりも，体験や遊びの要素があるとより良い」，「全体的に，『地域活動』と共に『地域の人に興味を学生に持ってほしかった』との課題意見も出された．

ふくしコミュニティプログラムの実践においては，各学部や専攻により課題は異なるが，本学が推進するふくし・マイスターの養成を通じて，学ぶ学問を問わず，ふくしコミュニティプログラムやフィールドワークを経験しながら，実践的に，地域の理解や地域への働きかけ，さらに多職種・多分野連携の学びを深めていけるような仕組みと学習支援ができるよう，努めていきたいと考えている．

注

1）COC 事業とは大学等が地域再生・活性化の拠点となることを目的とした助成事業で，2014 年度は全国の大学等から 237 件の申請があり，25 件が採択された．

2）制度中心の従来の「社会福祉」から，近年は「福祉」の領域や対象が拡大しており，多領域が関連・連携しあう広義の福祉を意味するため，本学では平仮名で「ふくし」と表現している．

3）様々な分野で「ふくし」の視点で活躍できる人材「ふくし・マイスター」を全学部共通の取り組みとして養成している．この「ふくし社会を担う人材＝ふくし・マイスター」は，大学の外の地域における他領域の人材や現場との関わりや活動を通した学び「地域志向学習」により養成される．

引用・参考文献

箕浦康子：フィールドワークの技法と実際，ミネルヴァ書房，p2，2003

日本福祉大学：学園戦略本部会議資料，2016

日本福祉大学 COC 事業推進本部：ふくし・マイスター HAND BOOK，日本福祉大学，2016

佐藤郁哉：実践フィールドワーク入門，有悲閣，2002

佐藤郁哉：方法としてのフィールドワーク，新曜社，2004

佐藤郁哉：フィールドワーク，新曜社，p219，2008